

V. V. バルトリド「タジク人：歴史的概説」

島田 志津夫 (訳・解題)

解題

凡例

訳文

解題

1924-25 年の中央アジアにおける民族別国境画定は、中央アジアの近現代史にとって重要な出来事であった。この措置は、1917 年のロシア革命以降、中央アジアにソヴィエト体制の支配を確立する過程で大きなターニングポイントとなり、現在の中央アジア諸国の原型、および民族区分の原型はこのときに成立したといえることができる。

これまで指摘されてきたとおり、多様なエスニック集団がしばしばモザイク状に居住していた中央アジアにおいては、人々の民族意識のあり方もさまざまであった。遊牧民たちの間では血統や部族意識が比較的強く、外敵に対して団結することによりある程度の民族意識を持つこともあった。一方、中央アジア南部のオアシス地域を中心とする定住民たちの間では、自分が住んでいる土地に対する帰属意識やムスリムとしてのアイデンティティに比べれば民族意識は希薄であったといわれている [小松 1995: 257]。

ロシア革命後、中央アジアにはトルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国、ブハラ人民ソヴィエト共和国、ホラズム人民ソヴィエト共和国が成立した。これらの共和国の境界は、基本的に帝政時代の行政区分、具体的にはロシア領トルキスタン、ブハラ・アミール国、ヒヴァ・ハン国のそれを継承するものであった。しかし、ソ連中央政府は、レーニンらが提唱した「民族自決」の原則にもとづき、中央アジアを民族ごとの新しい政治・行政区分に再編する作業をおこなった。もともと「民族」意識が曖昧であったこの地域で、「民族」のカテゴリーを確定し、再編することは困難であり、民族別国境画定は様々な問題と矛盾をはらむものとなった。たとえば、帝政時代には中央アジア南部の都市住民は「サルト」と呼ばれ、テュルク語とペルシア語のバイリンガルも多かったが、彼らは基本的に「ウズベク人」に分類された。また、トルキスタン自治共和国の主要民族はウズベク人、カザフ人 (当時の名称ではキルギズ人)、トルクメン人の 3 民族とされ、タジク人の名は挙げられておらず、民族別国境画定の議論の過程でもタジク人の代表は結果的に声を上げることができなかつたことから政治的敗北を喫したとの議論がある。すなわち、新生タジキスタンがウズベク共和国内の自治共和国の地位に甘んじたこ

とをウズベク人に対する政治的敗北とするのである。ペレストロイカ期から 90 年代のタジキスタンでは、タジク人の歴史的・文化的中心地であるブハラやサマルカンドがこの政治的敗北の結果ウズベキスタン領に留まることになったとして、そのタジキスタンへの帰属替えを主張する一部の知識人も現れた [小松 1995; 小松 1997]。

最近の研究では、民族言語の尊重や現地民族幹部の養成・優先的登用といったソ連の「現地化（コレニザーツィヤ）」政策や、ある程度の自治を保証する「民族」区分には両義性があったことが指摘されている。すなわち、連邦中央の側からすれば指導部の方針を諸民族に到達させるための統治の手段であり、現地エリート側からすれば「民族文化」確立、「民族的・文化的自治」獲得の手段であった [塩川 2004: 45-58]。中央アジアの民族別国境画定にかんしても、しばしばこれまでの欧米の研究に見られるような連邦中央による分割統治政策ではなく、国境画定は現地「民族」エリートとの議論と交渉の結果であり、現地側のイニシアティブがプロセスに影響を与えることもあったと指摘されている [帯谷 2005: 159; 帯谷 2006: 62-71; 帯谷 2012: 188-194]。

国境画定の前提となる「民族」カテゴリー確定の作業は、ソ連時代初期の政治家や実務担当者のみの手には負えるものではなく、専門家の助けが必要であった。国境画定とその後の「民族」意識確立の過程においては、とくに歴史学・言語学・民族学・考古学などを専門とする東洋学者たちが重要な役割を担った。なかでも、中央アジア史を専門とするロシア東洋学の碩学バルトリド（В. В. Бартольд, 1869-1930）の存在は特筆すべきものである。彼は膨大な著作を通じて読者の中央アジア史への理解を深めることに尽力したが、そのような彼の業績のうちから、ここでは中央アジアの民族別国境画定に関係している論文「タジク人：歴史的概説」[Бартольд 1925]を訳出した。国境画定直後の 1925 年に刊行されたこの論文は、後述するように、歴史記述を通じて、国境画定によって誕生したタジキスタンとタジク人の新しい「民族」意識の正当性を示す役割を担ったと考えられるからである。

名著『モンゴル侵攻期のトルキスタン』により 1900 年に博士号を取得したバルトリドは、1906 年ペテルブルグ大学東洋語学部正教授、1913 年科学アカデミー正会員となり、革命前にはすでに中央アジア史の権威として名声を博していた。また、中央アジアに複数回にわたって現地調査に訪れ、「トルキスタン考古学愛好者協会」（1895-1917）の設立にも携わるなど現地在住の研究者たちとも親交を深めていた [小松 1996: 118-120]。革命後、民族別国境画定の準備を始めていた現地ソヴィエト政権も、ごく初期から彼の学識に関心を持たざるをえなかった。1921 年 5 月 22 日、トルキスタン自治共和国人民委員会議のもとにトルキスタン先住民の習俗研究についての学術委員会が設立されると、早くもバルトリドに対しこの委員会の活動への協力が求められた。その活動には、中央アジアの民族地図の作成も含まれていた。このような仕

事には、セミョーノフ (А. А. Семенов, 1873-1958)、ザルービン (И. И. Зарубин, 1887-1964)、シュミット (А. Э. Шмидт, 1871-1939) ら現地の東洋学者たちも積極的に関わっていたが、現地ソヴィエト政権にはバルトリドのような権威が必要だったのである [Лунин 1981: 160-161]。また、この時期、バルトリドは「ロシア地理学協会中央アジア支部」の活動やタシュケントにおける中央アジア国立大学設立の準備にもたずさわっていた。

1925 年 1 月 9 日、民族別国境画定を実施する過程で、新生のタジク自治ソヴィエト社会主義共和国中央執行委員会のもとに「タジキスタンおよびその領域内のイラン系諸民族研究会」(Общество для изучения Таджикистана и иранских народностей за его пределами) が設立された(タジク自治共和国中央執行委員会開設まではトルキスタン自治共和国革命委員会の管轄)。地理学、経済学部門と歴史学・言語学、民族学部門の二部門から構成され、本部はタシュケント、支部がドゥシャンベに置かれた。研究会設立の目的は、タジキスタンの「植生・動物相を含む地理、自然的生産力、経済、歴史、考古、言語、方言、文学、哲学、民族学、芸術、物質文化、精神文化」の研究、すなわち新生タジキスタンについてあらゆる分野で研究することであった。この研究会の設立にはセミョーノフや民族学者アンドレーエフ (М. С. Андреев, 1873-1948) が積極的にたずさわりの、主要メンバーとなっていた。バルトリドもセミョーノフらを介して、この研究会の活動に参加することとなった [Литвинский, Акрамов 1971: 88-89; Шукуров 1970: 182]。

研究会は、アンドレーエフを団長にタジキスタンで複数回にわたって学術調査を実施し、ザラフシャン川上流域、ヤグノブ溪谷、ウラテッパ、カラテギン、カライフムなどで民族学・言語学・歴史学資料を収集した。研究会は、これらの調査報告を含む学術研究の成果として 10 点あまりの書籍を出版し、新生タジキスタンにおける学術の発展に貢献した。また、研究会が 1920 年代後半のタジク語のラテン文字アルファベットの制定や国語としてのタジク語の確立に重要な貢献をしたことが知られている [Шукуров 1970: 182-185]。

研究会が出版した一連の研究成果の中で異彩を放つのは、最初の出版物でもある『タジキスタン』と題する論文集である(タシュケント 1925 年刊)。この論文集には合計 13 編の論文が収録され、その内容は地理、水文、気候、植生、動物相、人口動態、歴史、文化、民族、経済、天然資源、交通、さらには内戦にも及び、タジキスタンについて網羅的に記述しようとの意気込みが感じられる。さらに驚くべきことは、この論文集が民族別国境画定の直後、研究会発足の同じ年という短期間のうちに準備され、出版されていることである。バルトリドの本論文もこの論文集で出版された。

本論文では、ホラズム人の活動、ソグド人の文化的・商業的活動、「タジク」「ガルチャ」「タート」「サルト」の語の起源・意味・用例、バダフシャー、ダルヴァーズ、カラテギンについ

ての歴史・地理的情報、帝政末期の言語状況について記述されている。記述の内容は、この論文に前後して出版された『トルキスタン史』[Бартольд 1922; バルトリド 1966] や『トルキスタン文化史』[Бартольд 1927a; バルトリド 2011ab] と一部重複する部分もあるが、バダフシャーなどについての記述はセミョーフらによって翻訳されたばかりのアフガニスタン人官吏による著作『カタガン、バダフシャー案内』（1923 著）[Кушкеки 1926] を参照しており、独自性を持っている。

なによりも重要なのは、タジキスタン成立後、本論文が「タジク人」の歴史について記述した最初の著作であり、その後のタジキスタンにおける歴史記述を方向付けたということである。それまで「民族」としてあまり実態のなかった「タジク人」の歴史を記述しようとしたとき、バルトリドは紀元前 6 世紀のホラズム人やソグド人の時代まで遡り、タジキスタンの領域を越えて中央アジア地域全体で活躍したイラン系諸民族の歴史を、テュルク系諸民族などとの関係の中で描き出した。しかし、こうしたバルトリドの意図とは裏腹に、その後のタジキスタンの歴史記述においては、タジク人そのものが紀元前にまで遡るとされ、「中央アジア最古の民族」とさえ呼ばれるようになった。たとえば、本論文以後最初の本格的な民族史であるガフーロフの『略述タジク民族史』では、タジク民族史の最古の記述を紀元前 3000 年紀のアナウ文化（トルクメニスタン）から始めている [Гафуров 1949: 13]。タジキスタンの領域を越えたイラン系諸民族の歴史を「タジク人の歴史」として記述するやり方は、独立後の現代タジキスタンにおいても続いている [宇山 2005: 71]。

民族別国境画定ののち、バルトリドは本論文と同様に『キルギス人：歴史的概説』（1927）、『トルクメン民族史概説』（1929）を著し、これらの著作は本論文と同様の役割を担った。未発表のまま残され、ソ連崩壊直前の 1991 年に初めて公刊されたメモの中で、バルトリドは以下のように述べている。「1924 年の中央アジア民族別国境画定の際に具体化された民族原理は、19 世紀の西欧の歴史によって創りあげられたものであり、現地の歴史的伝統とはまったく無縁のものであった。」「東洋の総ヨーロッパ化の影響のもと、ヨーロッパから取り入れられた原理がしばしば現地の伝統よりも強く語られることはまったく自然である。しかし、しばしばなされているように、現在起こっている変化の正当性を見いだすために現地の歴史的事実を歪曲あるいは恣意的に解釈することは、まったく根拠がないのである」[Олимов 1991: 165-166]。中央アジアの歴史記述や民族問題について考える上で、バルトリドのこの言葉は非常に示唆的である。

凡例

1. 訳出にあたっては『バルトリド著作集』所収のテキスト（1963）を底本としたが、その後

に手に入れることができた初版 (1925) も適宜参照した [Баргольд 1925]。

2. 原著者による注は注番号に*を付加し、著作集収録時に編者によって付された注の番号と区別した。また、本文、注における訳者による補足は [] で示した。
3. 本文中では当時の用例にしたがって民族名称として「キルギズ」、「カラ・キルギズ」の語が使用されているが、それぞれ現在のカザフ、キルギスに相当する。
4. 原著者が注記しているとおり、当時の用例にしたがって、本文では「トルコ」の語が「テュルク」の意味として使用されている。

訳文

タジク人：歴史的概説

1

今日のトルキスタンの元来の住民は、イラン系の民族に属していた。ここでは、イラン系種族の故地や古代における彼らの拡散の地理的境界、そして中世におけるその境界の絶え間ない縮小にかんする複雑で議論の多い問題については言及しない。ただ、紀元前 6 世紀から 1500 年以上にわたって今日のトルキスタンの領域に二つのイラン系定住民族、つまりソグド人とホラズム人が存在したという事実を究明するにとどめておこう。ソグド人とホラズム人の姿は、ペルセポリス遺跡近くのダレイオス王 (紀元前 522-486) の墓廟の遺物の中に見られる。そこでは、その姿が、この王の帝国の支配下に入った民族として描写されている。我々は、この二つの民族の言語についてある程度の正確な情報を持っているが、それはその言語の消失に近い時期についてのものにすぎない。このような情報は、紀元後 1000 年にホラズム人のビールーニー [973-1050 以後] がアラビア語で著した様々な民族の暦法にかんする著作の中に見られる¹⁾。ビールーニーは、ソグド人やホラズム人の暦について言及しながら、その月、日、宗教的な祭日などの名前を原語で引用している。これらの名称から、たとえばペルシア語と比較することにより、この二言語の方言的特徴についていくらかの知識を得ることができるであろう。

この二つの中央アジアのイラン系定住農耕民族のうち、ホラズム人は、長い期間にわたって政治的独立を保っていた。中央アジアでは、アカイメネス朝ペルシア帝国の侵入まで、ホラズム人が政治的に優勢であったのである。しばらくペルシアに服従したのち、ホラズム人はその従属から解放された。マケドニアのアレクサンドロスの中央アジア侵攻 (紀元前 330-327) のときには、ザラフシャン川の流域を中心とするソグド人のくにがペルシアの一地方であったのに対し、ホラズムには独自の王がいた。知られている限りでは、ホラズムにはアレクサンドロ

スも、グレコ・バクトリアの王も、イスラーム以前の中央アジアの遊牧民も侵攻しなかった。ムスリムの侵攻は、ホラズムの政治的独立と、のちには民族的独立の終焉を招くこととなった。しかし、ムスリムの支配者たちは、のちのヒヴァのウズベクのハンまで含めて、「ホラズムシャー」というイスラーム以前のホラズムの支配者の称号を受け継いだ。イスラーム以前のトルキスタンの諸地方の支配者の称号のうち、現代まで続いたのはこの称号だけである。

ソグド人の地域は、アレクサンドロスの帝国、のちにグレコ・バクトリア国家の領土に組み入れられた。少なくとも紀元前2世紀以降、おそらくはそれ以前からこの地域は遊牧民の襲来を多く受けることになった。したがって、この地域は、ホラズムとは違って政治的独立を保つのに好都合ではなかった。ムスリムの侵攻の直前になって初めて、サマルカンドの支配者が、ある程度まで全ソグド人の最高支配者となり、「ソグドのイフシード *ikhshīd*」という称号を名乗った（フェルガナの支配者も同様の称号イフシードを名乗った）。しかし、イフシードの権力は非常にもろく、イスラーム支配のもとにすぐに消滅し、のちのトルキスタンに何の痕跡も残すことはなかった。そのかわりにソグド人は、文化史の歩みにホラズム人より多くの影響を与え、トルキスタン以東の諸地域に西アジアの文化を伝える主要な伝播者となったのである。このようなソグド人の活動の歴史は、中国領トルキスタンと中国の国境地帯における考古学的発見によって初めて明らかにすることができた。敦煌の国境地帯に築かれた城壁の物見櫓から発見された1世紀の商業文書は、ビールーニーのソグド語にかんするデータと照合することにより、ソグド語で書かれたものであると認められた²⁾。この文書の文字は、ペルシアを通じて中央アジアに広まっていた東セム語、あるいは「アラム語」のアルファベットの一变種に属する。同様の文書は、ロプ・ノール地方でも発見された。はるか西方のトルファン地方では、同様にソグド語で書かれた仏教、マニ教³⁾、キリスト教の宗教文献の遺物が発見された。これらの遺物は、一般に7世紀かそれ以降の時期のものと認められている。我々は、それらの中に総じて同様のアルファベットを見いだすが、それは非常に変化した形をしている。ソグド語研究の第一人者である故ゴティオ教授は、その時間的な大きな隔たりにもかかわらず、「初期ソグド語」の文書と仏教文献とのあいだの言語的差異は認めていない。マニ教とキリスト教文献は、非常に後期の方言で書かれており、そのうえマニ教文献の方言とキリスト教文献の方言のあいだにも大きな違いがある。さらに、マニ教徒とキリスト教徒は、自身のソグド文字のほかに、それらの宗教の伝道者によって中央アジアにもたらされた文字も使用していた。

アカイメネス朝やアレクサンドロス、その後継者たち、グレコ・バクトリアの王たちの時代におけるイラン的中央アジアの遊牧民に対する文化的影響については、正確な資料が存在しない。ソグド人の商業、文化的活動の足跡は、インド・スキタイ国家と名付けられた時代になって初めて始められた。この国家は、東方から来住し、グレコ・バクトリア王朝を滅ぼしたトハ

ラ人、あるいはクシャーン人（おそらく彼らもイラン系の民族であろう）によって紀元前 2 世紀に成立された。同じ 2 世紀には、中国人がトルキスタンに侵入し、これも商業復興に貢献した。我々が知るもっとも古いトルコ²⁾系の文字の一つであるエニセイ・オルホン文字（両川の河畔から碑文が発見された。そのなかでも、8 世紀の年号のあるオルホン川の歴史碑文は、特別な重要性を持つ）は、ソグド文字から生まれたとする見解がある。しかも、我々に伝わる 1 世紀のものよりもさらに古いソグド文字の形から生まれたとするのである。

より明らかなことは、時代的には二番目のトルコ語アルファベットであるウイグル文字が、ソグド文字から発生したということである。この文字は、モンゴルを 100 年近く支配し（744-840）、その後何世紀かにわたって、中国領トルキスタンの現在のハミ（クムル）、トルファン、グチェンなどの地域を支配した民族の文字であった。どこでもそうであるように、中央アジアにおいても文字の導入は、宗教的なプロパガンダと関係があったにもかかわらず、ソグド民族文字の影響は、伝道者によってもたらされた文字、すなわち仏教のインド系文字、キリスト教のシリア文字、マニ教のアラム語斜体文字の影響よりも強力であった。のちにそこからモンゴル文字（モンゴル文字からは満州文字）が作られたウイグル文字は、以前考えられていたようにキリスト教徒のシリア文字から生まれたものではなく、ソグド民族文字から生まれたものであるという意見は、何よりも信頼できる。ソグド民族文字は、おもに仏教徒によって保持されていたが、キリスト教徒もマニ教徒も自身の宗教の文字と並んでこの文字を使用していた。ゴティオの見解によれば、ソグド文字とウイグル文字の類似性は、この二つの文字のあいだに境界を引くことが不可能なほどのものである。モンゴルで 9 世紀のウイグルのハンの漢文の碑文とともに発見されたソグド語の碑文は、ウイグル人が 762 年にマニ教を受け入れたことについて書かれているが、その文字の形はウイグル文字の形に非常によく似ている。このようにして、セム語のアルファベットは、ソグド人のおかげで太平洋にまで広まったのである。

ソグド人の商業がもっとも繁栄した時代は 7 世紀であった。その当時、ソグド人の祖国は、トルコ人のハンたち（今日のトルキスタンのトルコ人の政治的優勢は 6 世紀に確立した）や中華帝国の主権に服従していた。これらの政治権力は、キャラバンによる交易を促進した。ソグド人は、これを商業目的の旅だけでなく、遠方の国における商業コロニーの設立のために利用した。このことについては、考古学的発見のほかに、同時代の中国人による文献や、のちのムスリムによる情報がある。中国史料の中では、7 世紀に成立し、その 100 年後にはいくらかの自治を享受していたロブ・ノールのソグド人コロニーについて言及されている。630 年にトルキスタンを通った中国の旅行者玄奘 [602-664] は、チュー川流域からシャフリサブズまでを含めたすべての地域を Suli [窣利] (Sogd という語の d から l への方言的転訛による仏教・マニ教的語形 Sulik と推定される) の名で一括りにしている。どこでも文章語は一つであり、文

字も同一であった。文字は、(のちのウイグル人のように) 上から下へと書かれた。玄奘の記述の中には、当時ソグド人の国では仏教がおこなわれていなかったという言葉も見られる。同様に、イスラーム時代においても、ソグド人のあいだにはイラン人の民族的宗教であるゾロアスター教の信者以外には、マニ教徒とキリスト教徒がいたが、仏教徒はいなかった。したがって、ソグド語の仏教文献が、もし本当に7世紀のものであるならば、それはソグド人の故地ではなく遠方のソグド人コロニーで書かれたものである。玄奘の言葉のほかには、ソグド人の領域がチュー川河畔にまで達していたことについての情報はない。しかし、チュー川流域におけるソグド人の植民活動については、11世紀のムスリム著作家マフムード・カーシュガリーが述べている。彼は、スグダク *Sugdak* という民族について言及している。この民族は、「バラサグン^{*3)}に住み着いた人々であり、ブハラとサマルカンドのあいだのソグドの出身である。ただし、彼らはトルコ人の服装を受け入れた」という人々であった。また、同じ著作の別の個所では、「バラサグンの住民は、タラズ^{*4)}や『白い町』^{*5)}の住民と同様にソグド語とトルコ語を話した」と書かれている。おそらく、バラサグンやほかの土地の住民は、11世紀以降、トルコ化の影響により自身の言語を失うことになったのであろう。ソグド語を話す人々はまだいたが、ソグド語だけを話す人々はすでにいなくなっていたのである。

マフムード・カーシュガリーは、より東方のソグド人コロニーについては言及していない。しかし、10世紀末の無名のペルシア人地理学者は、トグズグズ人あるいはウイグル人の国にあった五つのソグド人村落について述べている。その国とは、すなわちソグド語の宗教文献の遺物が発見された中国領トルキスタンのことである。その地理学者は、これらのソグド人のあいだにはキリスト教徒、*gabr* (ゾロアスター教徒)、*šābi'ī* がいたことをつけ加えている。*šābi'ī* とは、当時、異教徒一般、とくに仏教徒を指す言葉として用いられ、サマルカンドではマニ教徒もこの名で呼ばれていた。このことから、ソグド人コロニーがイスラーム以前にはすでに成立していたことは明らかである。トルコ語のアルファベットがソグド文字起源であるということについての記憶も、13世紀初めの著作家ファフルッディーン・ムバーラクシャーに保持されていた。

イスラーム史料は、ソグディアナとイスラーム以前のサマルカンド諸侯の領土の南の国境を、玄奘と同様に「鉄門」、あるいはブズガル *Buzgal* 回廊としている。この回廊の向こうからトハラ人の国がはじまった。トハリスタンには、アム川上流の北側と南側の地域が含まれていた。玄奘によれば、トハリスタンではソグド人の国から駆逐された仏教がまだ優勢であった。また、そこには左から右に書かれる特別の文字があった。この点から、この文字はインド起源のものであると思われる。この文字と、クチャやホータンなどの東トルキスタンで用いられていた別のインド系文字のあいだに関係があったかどうかについては、玄奘の言葉の中には見いだすこ

とはできない。トハリスタンのイスラーム以前の文字について言及したイスラーム時代の作家は、サムアーニー (12 世紀) ただ一人である。ヴァシュギルド *Vashgird* (現在のブハラのファイザーバード) の町についての記述の中で、「かつてイスラーム初期にそこで知られており、書物に記録された文字」について言及している。こうして、サムアーニーは彼が発見した新しい事実については述べず、その同時代人によく知られていた事実について述べている。しかし、我々のもとにはただ一つの情報のみが伝えられている。それは、サムアーニーによって言及された「書物」が、おそらく、跡形もなく消えて無くなってしまっていることである³⁾。

2

7-8 世紀のアラブ軍の侵攻は、トルキスタンのイラン系住民の民族構成に変化をもたらし、それに対して新しい語を作った。イスラーム以前のサーサーン朝 (3-7 世紀) 時代のペルシアには、地理的にペルシアに近いベドウィン種族のタイ部族がいた。ユーフラテス川西方のヒーラ *Hīra* の町 (周知のとおり、イスラーム時代にはヒーラの近くにクーファの町ができた) は、彼らによって築かれたものである。ヒーラは、のちにペルシアの支配下にあったアラブ侯国の首都となった。3 世紀にはすでに、エデッサのあるシリア人作家は、すべてのベドウィン全体を指す言葉として、*«sarakina»* と並んで *«tay»* という語を使用している。その部族の名称から、中世ペルシア語、あるいはパフラヴィー語 (サーサーン朝とパルティア時代のペルシア文章語はパフラヴィー語と呼ばれている) とアルメニア語の「アラブ人」を意味する *tachik* という語が生まれた。イスラーム時代には、我々はそのより新しい形である *tāzīk* と *tāzī* という語を見いだす。*tāzīk* からは、トルコ語の *tājik* が生じた⁴⁾。z と j の文字の交替は、zh という音を示している。実際に、我々はマフムード・カーシュガリーの著作の中に *tāzhik* という形を見いだすことができる⁵⁾。彼は、11 世紀の別のトルコ系作家ユースフ・バラサグニーと同様に、この語を「ペルシア人」の意味で使用している。しかし、それ以前には、トルコ人はアラブ人のことをタジクと呼んでいた。中国語では、「大食 (*dashi*)」がアラブ人を意味した。

当時の認識では、イスラームを受け入れた者が、すなわちアラブとなった。728 年にブハラの高官が、アラブ人総督のアシュラス *Ashras* にトルキスタンにおけるイスラームの宣教の成功について報告したとき、「すべての者が、アラブとなった」という表現を用いている。トルコ人にとっては、アラブ人種の人々だけでなく、草原にいる彼らトルコ人のもとにきたイスラームとイスラーム文化の代表者たちもまた、*tājik* (トルコ語の発音による) であったことは、至極当然であった。まもなく彼らの中では、西イラン系の人々が多数派を占めるようになったこ

とは疑いない。中央アジアに移住したアラブ人はそれほど多くはなかったからである。そのために、トルコ人にとっては、ペルシア語が「タジク」語となった。トルコ人がイスラーム地域に侵入し、アラブ人とペルシア人という二つの主要なムスリムの民族についてより深く知るようになる、本来ペルシア人が、そしてそれに習ってトルコ人もアラブ人のことをタジクと呼んでいたのにもかかわらず、トルコ人は「タジク」の語をもっぱらペルシア人に対して用い、「タジク人」とアラブ人を区別するようになったのである。おそらくソグド人にとっても、アラブ人だけでなく、ムスリムのペルシア人もまたタジクであったのだろう。しかし、土着のイラン人による「タジク」という語のそのような用例を我々は知らない。

トルキスタンの定住地域のカリフ政権への併合は、土地の生活の性格をまったく変えてしまった。6-7世紀のソグド人の商業の成功にもかかわらず、その社会体制はマケドニアのアレクサンドロスの時代と同じままであった⁹⁾。この点では、アレクサンドロスの時代からムスリム侵攻の時代までの1000年以上の年月は、ほとんど跡形もなく過ぎ去ってしまった。すなわち、紀元前4世紀のマケドニア人と同様に、7世紀のアラブ人も、防備された大邸宅に住む地主貴族の支配をトルキスタンに見ている。都市は比較的少なく、その規模も大きくはなかった。しかし、この状況はすでにイスラーム時代の最初の世紀から変化し始めた。都市の規模は急速に大きくなり、商人階層が有力になった。おそらく、新しい原理をもたらしたのは、大部分がペルシアからの移住者であった。ペルシアでは、イスラームが、宗教によって神聖化された旧式の階級体制を支えていたサーサーン朝の王政を滅ぼし、ペルシア人の経済的、文化的な発展により広い自由な場を切り開いたのである。しかし、その当時ペルシア人は、その愛国心により、サーサーン朝に代表される国家機構の伝統を支持していた。この伝統は、ペルシア語と並んで中央アジアのイラン系の人々にも採り入れられた。トルキスタンのムスリムによる支配に、初めはカリフの総督として、のちに世襲の支配者として地元の貴族階級の代表者たちが参加するようになると、彼らはサーサーン王家の系譜をひく自身の一族を形成するようになった。このような王朝の中でもっとも強力であったのが、10世紀にブハラからトルキスタン、ホラーサーンまでを支配したサーマーン朝である。また、12世紀にはフッタル地方、つまり現在のクーラーブ [タジキスタン西南部] の地元の権力者も世襲の支配者となった。ブハラにおいてさえ住民たちは、10世紀にはまだソグド語を話していたが、サーマーン朝政府の公式文書には、アラビア語と並んで「宮廷語」(ダリー) と呼ばれたペルシア語が使用された。サマルカンド出身の詩人の一人であるルーダキーは、イスラーム・ペルシア文学の古典詩人に数えられる。ソグド語は、しだいに民衆の言葉からも排除されていった。今日、その唯一の生き残りともみなされているのは、ファン・ダリアの支流ヤグノブ川流域の二つの方言である。ヤグノブ方言は、我々が知るところのソグド文章語の直接の子孫ではない。しかし、それはどんな言語よりもキリス

ト教文献の言語に近いのである。

おそらく、イスラーム以前の時代にはすでに平野と山地の住民のあいだには、差異が生じていたのだろう。イスラーム時代には、我々は、音声構造的に非常に古い起源を持つ用語、すなわち *gar* 「山」、*garcha* あるいは現在の発音では *galcha* 「山地民」、*Garch* あるいは *Garchistān* 「山岳地方」という語を見いだす。とくに、(メルヴの) ムルガブ川上流地域がガルチスターンと呼ばれた。そこには、11 世紀の初めまでには独立した侯国が成立していた。そのほか、12 世紀のサムアーニーが「サマルカンドのガルチスターン」について言及しているが、おそらく、これはザラフシャン川上流の山岳地域を示しているのであろう。知られている限りでは、中世の文献において、アム川上流の山岳地域を指すためにこの語が使用された例は存在しない。おそらく、イスラーム時代の作家のあいだでは、ガルチャについての認識と彼らが理解できない別の言葉話す者についての認識は、統一されたものではなかった。ムルガブのガルチスターンの方言については、その地理的な位置からも推測できるように、ヘラートとメルヴの方言の間のようなものであると言及されているのみである。近代においても、中央アジアではガルチャという語は、「山地民」という意味で使用され、特定の言語グループを意味するものではなかった。1820 年、ブハラで、ロシアの大使メイENDORF は、ブハラの東方、ヒサールの北方、つまりザラフシャン川の上流地域に住む貧しく独立の民族がガルチャと呼ばれていたことを聞いている⁹⁾。彼らは、ペルシア語を話し、他の言語は知らないが、外見的にはタジク人とはまったく異なっていた。「ガルチャ」という用語をもっとも広い意味で使用している例は、イギリスの研究者ショウの著作 (1876 年) の中に見いだせる。彼によれば、クーラーブ、マスチャー、カラテギン、ダルヴァーズ、ルーシャーン、シュグナーン、ワハン、バダフシャーン、ゼーバクあるいはサングリーチュ、ムンジャンなどの住民が、「そのトルコ人の隣人たち」のあいだではガルチャの名で知られていたという。イラン語学にかんするドイツの全書に掲載されたガイガーの論文では、ガルチャという語は、特有の方言を話すパミール溪谷のイラン系住民の総称とみなされている⁹⁾。しかも、この地域には、平野と同一のタジク語が話されているダルヴァーズ、クーラーブ、カラテギン、バダフシャーンが含まれている。語源的には、ガルチャという語は、少しも侮蔑的な意味をもたないにもかかわらず、山地民の低い文化水準により、平地民はその語を侮蔑のニュアンスをこめて使用した。ペルシア語の辞書では、*garchagī* (*garcha* から派生した名詞) という語に対して、「愚鈍、無知」の意味が与えられている。また、*galcha* の意味は、「浮浪者」となっている。ザラフシャン川上流の山地民たちが (おそらく、他の地域では山地民自身にはガルチャという語が知られていない)、そのように呼ばれることを欲していないことはまったく当然のことである。ロシア人研究者の一人であるマスロフスキーは、ペンジгентより上流のザラフシャン川流域で、おそらくファルガルで

次のように聞いている。「我々はガルチャではない。ガルチャは、ヤグノブやマスチャーに住んでいる。あいつらは悪いタジク人で、我々はガルチャではない」¹⁰⁾。おそらく、一部の山地民のあいだでは、タジクという語をイスラームやその文化に同化した者として認識しているようである。マスロフスキーも、「ダルヴァーズの東部やシュグナーン、ルーシャーン」で「我々は最近タジクになった」¹¹⁾という表現を聞いている（残念ながら、おそらくこの研究者は、自身の話し相手に以前は何であったのかを尋ねることをしなかった）。

10世紀末、トルキスタンの政治的優勢は、ふたたび、そして最終的にトルコ人の手に移った。征服されたイラン系住民を指す言葉として、タジクのほかにタートという語も使用されるようになった。このタートという語の語源は明らかではない。この場合は、トルコ系ではない人々というよりは、むしろ定住民を意味するものであったのであろう。というのも、イラン人だけでなく、ウイグル人もタートであった。現在でもトルクメン人は、この語をそのような意味で使用している。彼らにとっては、ヒヴァのウズベク人もタートなのである。ザカフカスにおいては、タートという語は民族学的な意義を持っている。トルキスタンでは、地元のイラン人が自分たちのことを決してタートと呼ぶことはなかった。しかし、彼らは、トルコ人支配者の影響により自分たちをタジクと呼ぶようになったのである。タジクという語のそのような用例は、サーマーン朝の時代には見いだすことはできない。しかし、11世紀には、トルコ人の支配者と会話をするイラン人が、「我々タジクは (mā tāzīkān)」という表現を用いている¹²⁾。歴史家バイハキーは、1039年にガズナ朝のスルタン・マスウードと会話を交わした一人の高貴なイラン人の言葉として、そのような表現を書き記している（アム川以南のかつてのサーマーン朝の領土が、サーマーン朝のトルコ人親衛隊出身のガズナ朝の手に渡ったことは、周知のとおりである）。

11世紀から、イラン人地域は、ますますトルコ人の支配下に入っていく。もちろん、山岳地域あるいは山に守られた地方は、自身の独立をより長く保っていた。イラン系の王朝の中で、強大国に対し主権を表明したのは、ただゴール朝（12-13世紀）のみであった。ゴール朝は、アフガニスタン西部の山岳地域、ゴール地方に興り、スルハン・ダリア流域などアム川以北のいくつかの地域を含む広大な領域を支配した。

東方イスラーム世界の首位の座を巡る争いで、ゴール朝のスルタンは、13世紀初めにホラズムのトルコ系君主ホラズムシャーに敗れた。その当時、もうすでにホラズムは、政治的支配の面ばかりでなく、大部分の住民の言葉にかんしてもトルコ人のくにととなっていた。11世紀にはトルコ語が話されていなかったばかりか、ホラズム語で読み書きがなされていたのにもかかわらずである。残念ながら、我々のもとには、ホラズム語の文献資料や文書は残されていない¹³⁾。

王朝間の争いのほかに、民族間の対立も生じた。ホラズムシャー・ジャラル・アッディーンとモンゴル軍の戦いの話では、ホラズムシャー陣営のトルコ人司令官とゴールの司令官のあいだの対立について言及されている。トルコ人司令官が提案した妥協案は、「我々はゴール人であり、あなた方はトルコ人だ。とても一緒に生活することはできない」¹⁴⁾という言葉とともにゴール側によって拒絶された。ホラズムシャーの一人が、マーザンダラーンの支配者と同盟を結んだとき、ある同時代人はその友好の強さを信じず、次のように記している。「トルコ人とタジク人のあいだの道は暗い。友好の破滅は避けられず、友好と姻戚の関係もつねに敵意に終わる」と（実際に、その後マーザンダラーンはホラズムシャーによって征服された）。ホラズムのある王子が王権をめぐる争いに敗れ、ホラズムから逃亡しなければならなくなったとき、彼はマーザンダラーンには行かないようにと忠告された。「タジク人のあいだには、トルコ人への信頼はまったくございません」¹⁵⁾。それにもかかわらず、トルコ人はタジク人なしに済ますことはできなかった。マフムード・カーシュガリーは、すでに「タート人なくしてトルコ人なく、頭なくして帽子なし」という格言を引用している。もちろん、遊牧民支配下のタジク人の状況は、しばしば大変困難なものであった。歴史家ラシード・アッディーンによれば、その公正さで知られるペルシアのモンゴル人支配者ガザン・ハン（1295-1304）は、配下のモンゴル人たちにこう語ったという。タジク人から略奪することは簡単だが、その後、食料を得ることもより困難になるであろう。彼らは、タジクの女や子供を打ち、彼ら自身にとっても女や子供が大切であることを想い起こそうともしない。しかし実際は、タジク人も同じ人間なのだ、と。

トルコ人にとって、タジク人はイランの産業、商業、そして文化一般の代表者としてなくてはならない存在であった。ペルシア語は、トルコ人支配のもとでも行政語、文章語として保持された。イラン人商人は、自身の商業、植民活動の領域を拡大した。11世紀のトルコ人著作家マフムード・カーシュガリーとユースフ・バラサグニーは、サルトという語を「商人」の意味で使用している。この語は、現在、インド起源の言葉であることが証明されている。おそらく、トルコ人と最初に交渉を持った商人は、インド人であったにちがいない。そして、インド人商人の成功は、仏教の布教の成功と関係があった。仏教の消滅は、商人の役割がインド人からイラン人の手に移ったことに関係があったのかもしれない。この点で、タジク人は、自身の先駆者であるソグド人の活動をうまく引き継いだ。その結果サルトという語は、モンゴル人によって、あるいは、おそらく、すでにそれ以前に東方のトルコ人によって、商人を輩出した中央アジアのすべてのイラン系民族とその国家体制、文化に対して用いられるようになったのである。サルトという語のモンゴル語形が、「サルタウル *sarta'ul*」、「サルタクタイ *sartaqtai*」である。モンゴルの叙事詩では、英雄サルタクタイの姿が驚異的なダム建設者として描かれて

いる。ここから、草原においてイラン人は商人というだけでなく、物質文化、とくに灌漑技術の保持者でもあったということが明らかになる。また、ムスリムのタジク人は、以前のソグド人のように自身の宗教の宣教者ではなかった。モンゴル人のあいだには、キリスト教徒はいたが、商人の主要な代表者がムスリムであったのにもかかわらず、イスラーム教徒はいなかった。

遊牧民にとっては、一定の文化的タイプへの属性のほうが、民族や言語的屬性よりも重要視されていた。チンギス・カンは、彼に最初に服従したムスリムの支配者であるカルルク（セミレチエの北部にいた）のアルスラン・ハンをサルタクタイ（歴史家ラシード・アッディーンによればタジク）と呼んだ。カルルク人はトルコ系民族であり、もちろんトルコ系言語を話していたのにもかかわらず、チンギス・カンはそのように呼んだのである。チンギス・カン時代の銘文には、彼のサルタウル（サルタウル）への遠征、つまりホラズムシャー朝のムハンマドとその息子ジャラルール・アッディーンへの遠征からの帰還について記されている。1246年にモンゴルを訪れたフランス人プラノ・カルピニは、モンゴル人による「サルト」の征服についての記述の中で、ホラズムへの遠征について言及している。14世紀の無名のアラビア人文法学者によるモンゴル語にかんする著作¹⁶では、「サルタウル」という語はムスリムの意味であると訳されている。しかし、モンゴル人によって中央アジアとイランに確立され、14世紀末にはティムールの政権のもとに統一された諸国家においては、サルトとサルタウルという語は、しばしばタジクの同義語として使用されていた。ティムールの後継者の時代には、「サルト」の言語と文学はトルコ人のそれと対立するものとして語られている。つまり、ペルシャ人全般がサルトとして認識されていた。最近サモイロヴィチによって指摘されたサルトとタジクは異なるというバーブルの証言（16世紀初頭）は、まったく類例を見ないものである。カーブル地方にかんする記述の中で、バーブルは「草原と塩土にはトルコとアイマク（出自的には様々な血が混じった遊牧民）、アラブが生活し、都市や一部の村落にはサルトが、そしてそのほかの村落にタジクとアフガンが生活しており」、カーブル地方にはそのほかさらに三つの民族がいると指摘している¹⁷。しかし、バーブルがタジクとサルトのあいだのどこに両者の違いを見いだしていたのかは明らかではない。おそらく、言語的な違いは認めてはいなかったであろう。というのも、彼はカーブル地方で話されていた諸言語の一覧の中で、サルト語の名もタジク語の名も挙げず、ただペルシア語（fārsī）の名のみを挙げているからである。おそらく、ペルシア語はタジクとサルトの共通の言語であった。バーブルの著作のほかの個所では、タジクについては言及されていない。たとえば、フェルガナについての記述の中では、トルコ人とその言語に対立するものとして、ただサルト人とその言語だけが言及されている。

ウズベクのトルキスタン征服（16世紀）以後、サルトという名称は、ペルシア語と同様にトルコ語も話した被征服定住民に対して与えられた。とくに、ホラズムにおいては、17世紀

のアブルガーズィーの著作ばかりでなく、最近でも「サルト」は「ウズベク」に明確かつ一貫して対立する語であった。注目すべき点は、アブルガーズィーは話題がホラズムについて及んだときのみ例外的にサルトという語を使用していることである。彼は、イラン人全般とその言語について言及するときは、いつでもタジクという語を使用し、彼と同時代のブハラの子民をも「タジク」と呼んでいる。19世紀には、サルトという語がコーカンドの歴史家たちによって使用され、さらに「ウズベクとタジク、サルト」が同時に言及されることがたびたびあった。つまり、サルトはタジクとは区別されていたのである。サルトという語が、トルコ化した原住民の定住民を例外的に意味したかどうかについては、歴史家の記述からは明らかではない（ヨーロッパとロシアの学者たちは、サルトの語にそのような意味を与えようとしていた）。しばしばフェルガナにおいても、「すべての住民」という意味で「ウズベクとサルト」という表現が用いられた。つまり、サルトはタジクよりも明確にウズベクから区別されていたのである。フェルガナの生活にもっとも精通していた故ナリフキンは、一般にサルトの名で呼ばれていたフェルガナの定住民はウズベクとタジクから成っていると述べている。しかし、「フェルガナの領域では、サルト・ウズベク人がタジク人よりはるかに優勢である」点から、ナリフキンは「サルト語」を主として「テュルク語」と理解していた。一般に、ウズベク人が定住していくにつれ、サルトはもはやウズベクとではなく、以前のようにカザク [カザフ] と対立する語になった。本来の意味では侮辱的な意味はまったくなかったのにもかかわらず、現在では、サルトの語は原住民に対する蔑称とみなされ、使用されなくなっている。その侮辱的なイメージは、ただ遊牧民がサルトの語に農耕民や都市民への軽蔑のニュアンスを込めたために生じたものにすぎない。トルコ人は、ときどきそのような軽蔑の意味をこめてタジクについて語ったが、これは言語にはあまり反映することはなかった。というのも、タジクという語は、現在までもその本来的な意味、言語学的な意味と非常に密接な関係を保ち続けているからである¹⁸⁾。

3

イラン系住民が住む地域の中で、モンゴル人の侵攻の影響をまったく受けなかったのがバダフシャーンである。それ以前には、バダフシャーンは征服活動と無関係であったわけではない。イスラーム以前にはすでにトルコ人がそこに侵入していた。現在もバダフシャーンに住んでいるトルコ・カルルク人は、はやくもアラブ軍侵攻の歴史の中で言及されている。カルルクの王侯は、当時バダフシャーンも含めた広い意味でのトハリスタンの最高支配者であった。その少しのちには、トルコ語の称号を持つ人物がバダフシャーンとシュグナーンの支配者として言及

されている。モンゴル人の出現の直前には、ゴール朝がバダフシャーを支配していた。それにもかかわらず、モンゴル時代には、「バダフシャーはモンゴル軍ばかりでなくそれ以前もどんな征服者にも服従せず、3000年にもわたって（年代的には、明らかに間違った理解である）マケドニアのアレクサンドロスの子孫によって支配されてきた」と理解されていた。

ヨーロッパの学者たちのあいだには、この伝説に歴史事実の影響を見て取ろうとする傾向があった。すなわち、アレクサンドロスによるバクトリアの山岳地域への遠征と、彼が土地の王侯の娘ロクサネーと結婚したという歴史事実である。しかし、これまで見てきたように、イスラーム以前の中央アジアのイラン系支配者たちは、自身をサーサーン朝の子孫であると考えようとしていた。バダフシャーの支配者が「アレクサンドロス大王とダレイオス大王の娘」の末裔であるという伝説は、13世紀のマルコ・ポーロの著作に初めて見いだすことができる。のちに、ワハンからダルヴァーズ、カラテギンまでのアム川上流域、さらにインダス川支流の上流域（チトラル）までを含めたすべての諸地域の支配者が、アレクサンドロスの子孫であると自称するようになった。15-16世紀のイスラーム文献は、ただバダフシャーの王侯がアレクサンドロスの末裔であると指摘するのみである。そこでは、アレクサンドロスの助言者がバダフシャーに残されたその子孫のために手引書を著し、これによりバダフシャーの独立が保証されたということが述べられている。おそらく、バダフシャーの独立は、その隣人からの文化的孤立と関係があったのであろう。のちのバダフシャーの王侯スターン・ムハンマド（15世紀）が、ペルシア文学に熱中し自身でもペルシア語の詩を書くようになると、アレクサンドロスの遺訓に反する事態が起こった。すなわち、それ以降バダフシャーは、ティムールの子孫の支配下におかれるようになったのである。ウズベクの侵攻（16世紀初頭）により、バダフシャーには民族運動が起こった。コクチャ川左岸のカラ・イ・ザファルの砦は、民族運動の名残として現在までその姿をとどめている。この砦は、反乱の指導者の一人であるバダフシャーの王侯出身の高官ムバーラクシャー・ムザッファルによって復旧されたものであった（以前にも、ここには別の名前と呼ばれた砦があった）。ムバーラクシャーは、ウズベクを撃退することに成功したが、のちに自身の宿敵であるズバイル・ラーギーとの戦いで非業の死を遂げた。民族運動の指導者たちのあいだの反目は、ティムール家を利した。ティムール家のミールザー・ハンはズバイルを排除し、シャー・ラーズィー・アッディーンをリーダーとするイスマール派の運動に勝利することに成功したのである。

バダフシャーにおけるティムール家の支配は、ブハラハンであるアブドゥッラーがバダフシャーの征服に成功した1584年まで続いた。バダフシャーは、それ以降アム川以南のすべてのウズベク領がアフガン人によって征服されるまでウズベクの支配下にあった。17世紀末にウズベク・ハン国が崩壊すると、独自のミール（アミール）の王朝がバダフシャーを

支配した。この王朝の創始者ヤール・ベクは、現在のバダフシャーンの中心地ファイザーバードの建設者でもあった。このウズベク諸侯¹⁹⁾も、やはり自身をアレクサンドロス²⁰⁾の末裔とみなしていた。イシュカーシムとワハンはバダフシャーンの最高権力のもとにあったので、この時期は「ウズベク時代」と呼ばれた。おそらく、到達困難な地域であるダルヴァーズとカラテギンは、ウズベク支配からの独立を保っていた。歴史家マフムード・イブン・ワリーは、フッタラン地方の砦カラ・イ・フム（カラ・イ・フムブ、ダルヴァーズの主要都市）が、[ヒジュラ暦] 1047 (1637-8) 年になって初めてウズベクに服従したと述べている。また、そのときのウズベクの首領はオイラト部族出身のバーキー・アタリクであったこと、君主シャー・ガリーブが殺されてその首はブハラに送られたこと、幼少時からバルフのウズベク宮廷で生活していた彼の弟シャー・キルギズが、ウズベクの臣下としてその後継者に任命されたことなどが伝えられている。おそらく、この事件が 19 世紀末にマスロフスキーが聞いた話に影響しているのだろう。彼は、カラ・イ・フムブの町が「16 世紀、アミール・アブドゥッラー・ハンの地方長官キルギズ・ハンのダルヴァーズ支配の時代に」²⁰⁾ そのような名前を付けられたと聞いている。もちろん、年代的な不正確さはまったく当然なことである。というのもトルキスタンの伝説では、目立った事件はすべてティムールかアブドゥッラー・ハンの時代に帰す傾向があるからである。

カラテギンについては、同じ史料が [ヒジュラ暦] 1045 年ラジャブ月 (1635 年 12 月 11 日-1636 年 1 月 9 日、つまりカラテギンは通行不能と思われる冬期) に、カーフィル [異教徒] とみなされたキルギズ (カラ・キルギズ) 人 [キルギス人] 1 万 2000 家族が、12 人の指導者の指揮のもとカラテギンを通してヒサルに到着したということ伝えていいる。翌月の初めには、バルフのウズベクのハンがその指導者たちを承認した。最近でも、カラテギンは以前カラ・キルギズ [キルギス] に属しており、最近になって初めてタジクによって占められるようになったという伝説が、しばしば引用された。これは、トルコ人によって占められていた政権が、ふたたびイラン人の手に渡ったという珍しい例の一つであるかもしれない。カラテギンは、10 世紀にはすでに「ラーシュト」という名のもとにムスリムの地となっていたのにもかかわらず、メイェンドルフは 1820 年にブハラで、カラテギンはカーフィルの地であると聞かされている。メイェンドルフの言葉によれば、恐るべき (redoutables) カーフィルたちの中心地はカラ・イ・フムであった。実際には、ダルヴァーズにおいても、その南東の諸地域においても住民たちの宗教は、ずっと以前からイスラームであった。

19 世紀のタジク侯国の歴史については、我々はかなり多くの情報を西欧やロシアの旅行者の記録の中に見いだすことができる。しかし、やはりそこには多くのくい違いがあり、とくに年代にかんしては矛盾が見られる。これらの資料を集め、批判的に検討する必要があるかもし

れないが、これまでこのような困難な作業は行われていない²¹⁾。さらに困難なのは、アム川上流地域には文字文化がほとんど欠如し、自分の土地の過去について詳しい人間があまりいないという状況のもとに、旅行者の記述と地元の住民の話とを比較検討するということである。シュグナーン出身のサイイド・ハイダル・シャーによって1912年末にペルシア語で著されたシュグナーン史は例外である。これは、セミョーノフによってロシア語に翻訳され²²⁾、訳者による注には、旅行者の記述からの情報や、とくにロシアの公文書からの情報も引用されている。その他にも、ブルハーン・アッディーン・ハーン・クーシュカキーによってペルシア語で著された『カタガン⁷⁾、バダフシャー案内』²³⁾という著作がある。これは最近になってアミール・アマーヌッラーの治世〔1919-29〕に、軍事大臣ムハンマド・ナーディル・ハーンの旅行に際してアフガニスタンで書かれたものである。この本の中には、地理的な記述ばかりでなく、概略的な通史（12-18ページ）、バダフシャーの歴史（162-173ページ）、シュグナーンの歴史（336-348ページ）、ダルヴァーズの歴史（356-365ページ）などの歴史的な概説も含まれている。しかし、これらの記述は非常に表面的であり、しばしば支離滅裂なものである。この著作について御教示いただいたザルービン氏に感謝したい。

ここでは、詳細には言及せず、また名称や年代についての証言のくい違いの分析を試みることなく、主要な事実を検討することにとどめておく。総じて、バダフシャーのウズベクへの服従は、タジク諸侯国を互いの争いからも、ダルヴァーズとの争いからも救うこととはならなかった。ダルヴァーズは、バダフシャーにも従わず、19世紀の20-30年代にクンドゥズを支配したムラード・ベクにも従っていなかった。ムラード・ベクには、一時期バダフシャーとその東方の諸地域、つまり南はチトラルから北はクーラーブまでの地域が服従していた。ムラード・ベクの山岳地帯への遠征は、不成功に終わった。進軍は夏に行われたのにもかかわらず、彼はシュグナーンでの雪崩によって100人近くの兵士を失ったのである。旅行者ウッド（1837-38年）によれば、ダルヴァーズのシャーは、少なくともその隣人の弱い軍事力と比較して格段にすぐれた軍隊を持っていた²⁴⁾。ウッドは、カラテギンについてコーカンドとクンドゥズのどちらに服従するか揺れていると述べている（ただのうわさ話による情報として。ヨーロッパ人の中で初めてそこに到達したのはロシア人であり、それもようやく1878年になってからのことである）²⁵⁾。カラテギンが、コーカンドのハンであるマダリー（1822-1842）によって征服されたのは周知のとおりである。そのとき、コーカンドの指揮官ムハンマド・シャリーフ・アタリクが、ダルヴァーズも征服したという情報もある。ダルヴァーズのハーキム〔支配者〕、スルターン・マフムード・ハンはフェルガナに連行されたが道中で死亡し、〔フェルガナ地方の〕シャーヒマルダーンに埋葬された。コーカンドのハンたちは、カラテギンに対する野望をあきらめていなかったが、1842年以降のコーカンド・ハン国における争乱の時期に、カ

ラテギンとダルヴァーズはその独立を獲得した。しかし、1870年代になると両者はブハラによって征服された。セミョーノフによれば、アレクサンドロスの末裔であるダルヴァーズの最後の君主スィラージュ・ハンは捕虜となりブハラで死亡し、彼の弟マフムード・ハンはアフガニスタンのアミール、アブドゥッラフマーン（1880-1901）の大宰相となったという。セミョーノフは、これをダルヴァーズで「土地の住民と数人のブハラの役人」から聞いた話としている。また、ブルハーン・アッディーンによれば、「シャー・マフムード」はダルヴァーズの支配者であり、アブドゥッラフマーンがサマルカンドにいたとき（1869-1879年）、つまりブハラによるダルヴァーズ征服の前後の時期からアブドゥッラフマーンと関係を持っていた。それゆえ、アブドゥッラフマーンは即位後、ダルヴァーズから追放されていたシャー・マフムードとその弟シャー・アフザルを〔フェルガナ地方の〕マルギランからカーブルに呼び寄せたのである。彼らは、その数年後にカーブルで死亡した。セミョーノフは、カラ・イ・フムでアレクサンドロスの末裔であるかつてのダルヴァーズの支配者の「ばらばらに壊された石の王座」を目撃している。また、マスロフスキーは、「アレクサンドロスの盟友によって作られたといわれる花崗岩製の大鍋が、現在でも残っている。地元民の話によれば、この大鍋からカラ・イ・フム、あるいはカラ・イ・フムブという名が付けられたらしい。（その字義は、『大鍋の砦』）」²⁶⁾と記している。

カラテギンの帰趨は、議論の余地がありえた。カラテギンは、しばらくコーカンド・ハン国によって領有されたので、パミールとカシュガリアにおける旧コーカンド・ハン国領の主権を主張するロシア政府は、カラテギンも自身の領土であると言明することができた。しかし、ロシア政府はそれをしなかった。フェルガナのロシアへの併合後の1876年8月、[ロシアの将軍]スコベレフはブハラへの従属関係を保っていたカラテギンのベクとのあいだに国境にかんする条約を締結したのである。

アム川以南のタジク人とウズベク人は、次第にアフガン人に服従するようになった。この過程は、アフガニスタンのアミール、ドースト・ムハンマドの治世の1850年代から始まり、そのほぼ40年後の1880年代に完了した。地元の支配者は、アフガン人に服従し、条件が整うとふたたび彼らに対して反乱を起こすということを何度か繰り返した。ロシア人の侵攻の影響により、アフガン人はときどき自身の権力を強化するために行動を起こした。1882年の夏に医者であり植物学者であるレーグリーがシュグナーンに到着したことを聞くと、アミール・アブドゥッラフマーンはグルザール・ハーンをシュグナーンに派遣した。彼は、土地の支配者ユースフ・アリー・ハーンをバダフシャーンに出頭させることに成功し、そこで彼とルーシャーンの支配者である彼の息子クバード（ユースフ・アリー自身も父の治世にはルーシャーンを支配した）の身柄を拘束してカーブルに連行した（ユースフ・アリーについては、すでに1871年

に言及されている。彼の兄シャー・アミール・ベクは、父アブドゥラヒームによりシュグナーンの王位継承権を奪われ、そのイスマーイール派への傾倒により 60 年代にしばらくのあいだワハンを支配した。ここから、当時ルーシャーンは土地の世襲のアミールの支配下にあったというイギリス人イエイトの 1888 年の見解 [おそらく [Yate 1888] のこと] は、たぶん正しくはないであろう。アブドゥッラフマーンのいところでアフガン・トルキスタンの知事であったイスハークがアブドゥッラフマーンに対して反乱を起こしたことにより、アフガン軍がシュグナーンから撤退した 1888 年に最後の反乱が起こった。そのとき、かつてのシュグナーンの支配者の子孫であるムハンマド・アクバル・ハーンが、ヒサルからシュグナーンに入った。イスハークの敗北ののち、アフガン軍はシュグナーンとその他の地方に戻った。アンドレーエフによれば、1889 年から 1891 年のあいだにゼーバクとワハン、イシュカーシムがアフガン人に服従した。1895 年のパミールの国境画定により、タジク人の政治的独立は消滅し、彼らの土地のロシアとアフガニスタン、ブハラによる分割が完了した。この国境画定は、住民に経済的な不利益をもたらした。というのも、バダフシャーンは政治的には他の地方から孤立していたけれども、経済的にはつねに西はクーラーブから東はシュグナーンまでの諸地方と関係を持っていたからである。

トルキスタンの三つのウズベクのハン国のなかで、タジク語が行政・文化言語としてもっとも使用されたのはブハラ・ハン国であり、もっとも使用されなかったのがヒヴァ・ハン国である。コーカンドは、その中間の位置を占めていた。ヒヴァにくらべ、ブハラにおけるタジクの要素は強力であった。そのために、ブハラの支配階級、とくに軍人階級はウズベク人であったのにもかかわらず、ヒヴァの歴史家はブハラ軍をタジクとさえ呼ぶほどであった。タジク語は、ブハラ・ハン国ばかりでなく、1920 年 9 月のブハラ共和国設立時にも公用語としての地位を保っていた。

ウズベク人が定住化するにつれて、タジク人とその言語は、ますます山地へと追いやられた。こうして、ナリフキンに「タジク人の民族的特徴の一つは、彼らの山地への志向である」という誤った結論を導かせるような現在の状況ができあがったのである。ウズベク人の定住化という事実が、すべてのトルキスタンにとってどのような意味を持っていたのかについては、たとえば、キシュラク（トルコ語で「冬営地」の意）という語の歴史に反映されている。1598 年 1 月、すなわちブハラのアブドゥッラー・ハンの死の直前に書かれた文書では、*deh-nishīn*, *qīshlak-nishīn*, *ṣaḥrā-nishīn* —— 村落の住民、冬営地の住民、草原の住民の三つが区別されていた。キシュラクの住民にとって冬営地はしだいに唯一の住居となり、彼らは完全な定住農耕民と遊牧民の中間的な位置を占めるようになっていった。周知のとおり、現在ではキシュラクは完全な定住農耕民の村という意味を持ち、ウズベク人ばかりでなく山地のタジク人さえも自分たちの村を

キシュラクと呼んでいる。

ロシアの征服は、タジク人村落をトルコ系遊牧民の略奪的襲来から解放した。チルチク川上流の Piskon (Pskem) 村がカラ・キルギズ [キルギズ] 人によって最後に略奪されたのは、ロシアがタシュケントを占領したとき、つまり 1865 年頃のことであった。ロシア支配のもとでは、そのような略奪は不可能となった。一方では、秩序の確立とコミュニケーション手段の改善の影響により、多数派の言語であるウズベク語が全住民の共通語となっていた。ロシアによる征服の時期、チルチク川上流の山間部の村落では、誰もトルコ語を理解しなかったと私は聞いている。しかし、私がトルキスタンを旅行したとき、私自身が「Turkī namēdānam (私はトルコ語がわからない)」という言葉聞いたのは、ブハラにおいてただの一度だけであった。アカデミー会員ラドロフは、1868 年にサマルカンドの街路でもっぱらペルシア語が話されていたのを聞いている。しかし、私の (たとえば 1904 年に) みたところ、サマルカンドの住民はペルシア語よりもトルコ語をはるかに多く話していた。ペルシア語よりもトルコ語でのほうが、容易にロシア当局と交渉をすることができた。というのも、ロシア人はタタール人やキルギズ人 [カザフ人] の通訳を連れていたからである。この理由により、寵を失ったかつてのサマルカンドのカーズィー・カラーン [大裁判官]、カマール・アッディーンは、1871 年に自身の母語であるペルシア語ではなく、ロシア人にもその内容がわかるようにトルコ語で潔白の上申書を書いた。それと同じ頃、官製の『トルキスタン通報』«Туркестанские ведомости» に地元言語による付録を発行することの必要性が認識されるようになった。それらの言語の中には、当初、「チャガタイ語」やキルギズ語 [カザフ語] と並んでタジク語も加えられた。しかし、その後、タジク語ではなく「トルコ語 (サルト語) とキルギズ語 [カザフ語] の付録」について議論されるようになった。1871 年から、この二つの言語による付録が月に 4 回発行された。そのうち 2 回はサルト語、もう 2 回はキルギズ語 [カザフ語] の付録であった。1883 年からは、それに代わってただ「サルト語」だけによる小さな新聞が発行されるようになった。1920 年にトルキスタン共和国の憲法が承認されたとき、その「原住の民族」として認められたのは、キルギズ人 [カザフ人] とウズベク人、トルクメン人のみであった。この地域の最古の住民であるタジク人は、忘れられていたのである。1924 年の民族的境界画定がタジク民族の復活をどれほど促すかは、未来がこれを示すであろう²⁷⁾。

原著者注

- *1) マニ教の教義は、3 世紀に古代ペルシアの宗教 (ゾロアスター教) と仏教、キリスト教の理念を融合することにより生まれた。
- *2) ロシアの学术界で一般的であるように、ここでは「トルコ」(турки, турецкий) の語を、学者たちによって人為的に考案され、トルキスタンやザカフカスにおいては現実のロシア語の使用とは縁遠い「テュ

ルク」(тюрки, тюркский) の語の意味として使用する。(編者補注: ロシア語と学術用語の発展により、「テュルク」の語は、多くのあるいはすべてのテュルク系諸民族に対して用いられる、より一般的で普遍的な意味を持つ用語としての地位を獲得した。他方で、「トルコ」の語はより狭い意味で用いられるようになり、現在ではアナトリアのトルコ人、彼らの言語、トルコ国家(かつてはオスマン国家)に対してのみ使用されている。)

- *3) この町の正確な位置については、議論の余地がある。しかし、やはりチュー河流域に位置したのであろう。
- *4) あるいは、タラス。現在のアウリエ・アタ。[この町の名はソ連時代に一時期ジャンブルと改名され、カザフスタン独立以降ふたたびタラズと改名されている。]
- *5) おそらく、この町はアウリエ・アタの西方にあった。
- *6) カタガンとは、18世紀初頭から[現アフガニスタン領の]クンドゥズを領有したウズベク部族の名称である。

編者注

- 1) Bīrūnī, *Āthār al-bāqīya* [Bīrūnī 1878]
- 2) ヘニングによって明らかにされているように、敦煌から出土したソグド文書は、1世紀ではなく4世紀初頭のものである [Hening 1948]。
- 3) ソグド語とトハラ語について詳しくは、[Баргольд 1927b] 参照。
- 4) 本来「アラブ人」という意味を持つ *tāzī* あるいは *tāzīk* の語から「タジク」という語が派生したことについては、『バルトリド著作集』第2巻第1分冊] 121 ページ注 6 も参照のこと。→ [以下同書 121 ページ注 6 より訳出] *tāzī* (アラブ) から「タジク」という民族名称が発生したことについての問題、および(アラブという意味での) *tāzī* と東方のイラン系民族に対して用いられた *tājīk* の二つの用語の関係についての問題は、最終的にまだ解決されていない。バルトリドの見解に対するいくつかの反論については、[Боровков 1953] 参照。また、[Лившиц 1962: 87-88] と比較のこと。
- 5) *tājīk* と並んで *tāzhīk* という形が、13世紀末から14世紀初頭のヘラートの著作家サイフ・アッディーンによってしばしば使用されている。彼が著したヘラートの歴史にかんする著作は、バルトリドの死後出版された [Ta' rīkh Nāma-i-Narāt 1944]。
- 6) バルトリドのこの主張には、賛成することができない。『バルトリド著作集』第2巻第1分冊] 117 ページ注 18 も参照。→ [以下同書 117 ページ注 18 より訳出] ブルジョア歴史学者の間に流布している、東洋における「永遠の封建制度」という概念を認めたバルトリドのこの主張には賛成するわけにはいかない。彼は、『トルキスタン文化史』において紀元前4世紀のソグドの社会体制が紀元後7世紀のそれと同様であったと推定している [バルトリド 2011a: 24]。このバルトリドの推定は、当時、中央アジア古代史について研究が進展していなかったことにもよるものである。ソヴィエトの研究者たちは、社会・経済の面でもっとも発展していた中央アジアの諸地域では紀元前4-5世紀から紀元後3-4世紀にかけては奴隷所有制が優勢であり、4-5世紀には封建制への移行が起こったとの意見を持っている。この問題についての最新の議論については [МОНС 1955: 413-568, 585] 参照。
- 7) リフシツが指摘したように、これは必ずしも正確ではない。言語的には、キリスト教文献の言葉は、8-10世紀のソグド語の口語に非常に近い。けれども、ヤグノブ語はソグド語の方言であり、文献資料によっては証明されていないものである。
- 8) メイエンドルフ以前には、1813-1814年にコーカンド・ハン国に滞在したナザロフが「ガルチャ」について言及している。彼は、ガルチャという語が「山間部のペルシア人」を意味する言葉として使用されていたと説明している。また、彼はロシア人使節の道中に見た「山間部のペルシア人」について、簡潔に、しかし内容豊かにその特徴を描写した [Назаров 1821]。そこでは、彼らの基本的な生業や、生活習慣の特徴などについて指摘されている。この資料の学術的意義は、以下の論文で初めて注目さ

- れた。[Иванов 1939]
- 9) [Geiger 1898-1901]
- 10) [Масловский 1901: 19]
- 11) [Масловский 1901: 19]
- 12) [Tārikh-i Baihaki 1862: 746]
- 13) 最近、ホラズム語研究に 13 世紀のホラズム人 Najm al-Dīn Abū al-Rāj al-Ghazmīnī によるアラビア語の全書 *Qinyat al-munya* が利用されるようになった [Волин 1939: 111-126]。現在、トブラク・カラの宮殿の発掘によって発見された 3 世紀末から 4 世紀はじめのホラズム語の経済文書も、よく利用されるようになっている [Толстов 1958: 207-212]。
- 14) [Juvaynī 1916: 193]
- 15) [Mar'ashī 1850: 248, 253ff]
- 16) 著者は、Jamāl al-Dīn ibn Muhannā (d. 1425) である。彼の著作 *Kitāb-i tarjumān-i fārsī va turkī va muḡhūlī* のテキストと翻訳、解説は、[Мелиоранский 1903] 参照。
- 17) 原文は、「平原や平地には、テュルク人、アイマク族、アラブ人がいる。都市や若干の村々には、サルト人がいる。また若干の村々や諸地方には、パシャーイー、バラーチー、タージーク、バーラーキー、アフガンがいる」[バーブル 2014: 42]。さらに、カーブル地方で話されていた言語について、バーブルは 11-12 の言語の名を挙げて、以下のようにリストアップしている。「アラビア語、ペルシア語、テュルク語、モグール語、ヒンディー語、アフガン語、パシャーイー語、バラーチー語、ガバリー語、バラキー語、ラムガーニー語」[バーブル 2014: 43]
- 18) サルトの語の意味については、『バルトリド著作集』第 2 巻第 2 分冊に収録されている以下の諸論文も参照。“О преподавании туземных наречий в Самарканде”, “Вместо ответа г-ну Лапину”, “Еще о слове «сарг»”, “Сарг”。
- 19) ウズベクのカタガン勢力に対して 1068 (1657-58) 年にバダフシャーンのアミールとして任命されたヤール・ベクとその後継者たちは、おそらくのちのバダフシャーンの権力者の大部分と同様に、バルフとブハラにウズベク君主の主権を正式に認めていた。(ヤール・ベクについては、[Та'рих-и Бадахшāн 1959: 2a-5b] 参照。)
- 20) [Масловский 1901: 28]
- 21) 現在、カラテギンの歴史については、[Кисляков 1954] 参照。
- 22) [Семенов 1917]
- 23) 1926 年にロシア語訳が出版された [Кушкеки 1926]。バダフシャーンの歴史については、[Та'рих-и Бадахшāн 1959] も参照。
- 24) [Wood 1872: 249]
- 25) [Wood 1872: 249]
- 26) [Масловский 1901: 28]
- 27) 社会主義建設の過程におけるわが国の民族問題解決の結果により、タジク人民は、ソ連の他の諸民族と並んで、その多方面にわたる経済的、文化的発展のあらゆる可能性を享受した。バルトリドのこの歴史概説の執筆後まもなく、タジク人は自身の国家をも享受した。1924 年 10 月 14 日、中央アジアにおける民族別国境画定にともないタジク自治ソヴィエト社会主義共和国が設立され、その後 1929 年 10 月 5 日にはタジク・ソヴィエト社会主義共和国として改編された。

参考文献

- 宇山智彦 2005 「旧ソ連ムスリム地域における『民族史』の創造：その特殊性・近代性・普遍性」酒井啓子・白杵陽 (編) 『イスラーム地域の国家とナショナリズム』(イスラーム地域研究叢書 5) 東京大学出版会、55-78 頁

- 帯谷知可 2005 「書評 Arne Haugen, *The Establishment of National Republics in Soviet Central Asia*. New-York: Palgrave Macmillan, 2003, x+276 pp.」『アジア経済』46/11-12、156-160 頁
- 2006「旧ソ連中央アジアの国境：20 世紀の歴史と現在」岩下明裕（編著）『国境・誰がこの線を引いたのか：日本とユーラシア』北海道大学出版会、57-80 頁
- 2012 「「民族」の成立と国境画定：中央アジア」帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣（編）『中央アジア』（朝倉世界地理講座 5）朝倉書店、183-195 頁
- 小松久男 1995 「二つの都市のタジク人：中央アジアの民族間関係」原暉之・山内昌之（編）『スラブの民族』（講座スラブの世界 2）、250-274 頁
- 1996 「バルトリド」高田時雄（編著）『東洋学の系譜 [欧米編]』大修館書店、115-125 頁
- 1997 「批評と紹介 R. マーソフ著『粗野な分割の歴史』」『東洋学報』78/4、67-74 頁
- 塩川伸明 2004 『民族と言語：多民族国家ソ連の興亡 I』岩波書店
- バーブル 2014 間野英二（訳注）『バーブル・ナーマ：ムガル帝国創設者の回想録』第 2 巻、平凡社（東洋文庫）
- バルトリド 1966 長沢和俊（訳）『中央アジア史概説』角川文庫
- 2011ab 小松久男（監訳）『トルキスタン文化史』第 1-2 巻、平凡社（東洋文庫）
- Bīrūnī: 1878 *Chronologie orientalischer Völker von Albērūnī*, Hrsg. von C. E. Sachau, Leipzig.
- Geiger W. 1898-1901 “Kleinere Dialekte und Dialektgruppen”, Hsrg. von W. Geiger und E. Kuhn, *Grundriss der iranischen Philologie*, Bd. I, Abt. 2: 287-423.
- Hening W. B. 1948 “The date of the Sogdian Ancient Letters”, *BSOAS*, 12/3-4: 601-615.
- Juvaynī: 1916 *The Ta'riḫ-i-Jahān-gushā of 'Alā'u 'd-Dīn 'Aṭā Malik-i-Juwaynī (composed in A.H. 658 = A.D. 1260)*, ed. with an introduction, notes and indices from old MSS. by Mirzā Muḥammad ibn 'Abdu'l-Wahhāb-l-Qazwīnī, pt. II, Leiden-London.
- Mar'ashī: 1850 *Sehir-eddin's Geshichte von Tabaristan, Rujan und Masanderan*, Persischer Text, hrsg. von B. Dorn, St.-Pbg.
- Shaw, Robert 1871 *Visits to high Tartary, Yarkand and Kashgar*, London.
- Tāriḫ-i Baihaki: 1862 *The Tāriḫ-i Baihaki*, ed. by the late W. H. Morley, Calcutta.
- Ta'riḫ Nāma-i-Harāt: 1944 *The Ta'riḫ Nāma-i-Harāt (The History of Harāt) of Sayfī ibn Muḥammad ibn Ya'qūb al-Harawī*, ed. with introduction by Mohammad Zubayr aṣ-Ṣiddīqī, Calcutta.
- Wood J. 1872 *A Journey to the source of the river Oxus*, New edition, London.
- Yate C. E. 1888 *Northern Afghanistan or letters from the Afghan Boudary Commission*, Edinburgh.
- Бартольд В. В. 1922 *История Туркестана (Конспект лекций)*, Ташкент. [Бартольд В. В. 1963 *Сочинения*, т. II(1), Москва: 107-163.]
- 1925 “Таджики. Исторический очерк”, *Таджикистан. Сборник статей*, под ред. Н. Л. Корженевского, Ташкент: 93-111. [Бартольд В. В. 1963 *Сочинения*, т. II(1), Москва: 449-468.]
- 1927a *История культурной жизни Туркестана*, Ленинград. [Бартольд В. В. 1963 *Сочинения*, т. II(1), Москва: 167-433.]
- 1927b “К вопросу об языках согдийском и тохарском”, *Иран*, т. I: 29-41. [Бартольд В. В. 1964 *Сочинения*, т. II(2), Москва: 461-470.]
- Боровков А. К. 1953 “Филологические заметки”, *Сборник статей по истории и филологии народов Средней Азии, посвященный 80-летию со дня рождения А. А. Семенова*, Сталинабад: 49-53.
- Волин С. Л. 1939 “Новый источник для изучения хорезмийского языка”, *Записки Института востоковедения АН СССР*, т. VII: 79-91.
- Гафуров Б. Г. 1949 *История таджикского народа в кратком изложении*, т. I, Москва.
- Иванов П. П. 1939 “Казахи и Кокандское ханство (к истории их взаимоотношений в начале XIX в.)”, *Записки Института востоковедения АН СССР*, т. VII: 92-128.
- Кисляков Н. А. 1954 *Очерки по истории Каратегина. К истории Таджикистана*, изд. 2-е, испр. и дополн.,

- Сталинабад.
- Кушкеки: Бурхан-уд-Дин-хан-и Кушкеки 1926 *Каттаган и Бадахшан*. Данные по географии страны, естественно-историческим условиям, населению, экономике и путям сообщения, Ташкент.
- Лившиц В. А. 1962 *Согдийские документы с горы Муг. Чтение. Перевод. Комментарий*, Вып. II, Москва.
- Литвинский Б. А., Акрамов Н. М. 1971 *Александр Александрович Семенов (Научно-биографический очерк)*, Москва.
- Лунин Б. В. 1981 *Жизнь и деятельность академика В. В. Бартольда. Средняя Азия в отечественном востоковедении*, Ташкент.
- Масловский С. 1901 “Гальча (Первобытное население Туркестана)”, *Русский антропологический журнал*, 2: 17–32.
- Мелиоранский П. М. 1903 “Араб филолог о монгольском языке. Арабский текст издал и снабдил переводом, глоссариями, комментарием П. М. Мелиоранский”, *ЗВРАО*, т. XV: 75–172.
- МОНС: 1955 *Материалы объединенной научной сессии, посвященной истории Средней Азии и Казахстана в дооктябрьский период*, Ташкент.
- Назаров Ф. 1821 *Записки о некоторых народах и землях средней части Азии Филиппа Назарова, Отдельного Сибирского корпуса переводчика, посланного в Кокант в 1813 и 1814 годах*, СПб.
- Олимов М. 1991 “В. В. Бартольд о национальном размежевании в Средней Азии”, *Восток*, 5: 162-167.
- Семенов А. А. 1917 “История Шугнана. С персидского перевел и примечаниями снабдил А. А. Семенов”, *Протоколы заседаний и сообщения членов Туркестанского кружка любителей археологии*, год XXI: 1–23.
- Та’рїх-и Бадахшāн: 1959 *Та’рїх-и Бадахшāн. «История Бадахшана»*. Фотографическая репродукция рукописного текста, введение, указатели. Подготовил к изданию А. Н. Болдырев, Ленинград.
- Толстов С. П. 1958 “Работы Хорезмской археолого-этнографической экспедиции АН СССР в 1949–1953 гг. ”, *Труды ХАЭЭ*, т. II: 7–258.
- Шукуров М. Р. 1970 *История культурной жизни советского Таджикистана*, Душанбе.

V. V. Bartol'd "The Tajiks: A Historical Essay"

SHIMADA Shizuo (Translation and Introduction)

This is the Japanese translation of V. V. Bartol'd's article "The Tajiks: A Historical Essay" (1925). National delimitation of Central Asia (1924–25) was one of the most important events in the modern history of Central Asia. As the result of this event that was operated according to Soviet national policy, the basic frameworks of today's Central Asian nations and national republics were formed. So it can be said that national delimitation is a significant point in the discussion about the national questions in Central Asia.

In the process of the delimitation, not only took part Soviet politicians and officials, but Oriental scholars also contributed. In particular, the role of V. V. Bartol'd (1869–1930), a prominent Russian scholar at that time in this process is worthy of attention. Because Soviet authorities needed his great knowledge about Central Asia to carry out their national policy and they asked him to write national histories of newly established republics and its peoples.

In January 9, 1925 "The association for research on Tajikistan and Iranian ethnic groups in its territory" was constituted at the Sovnarkom of Tajik ASSR. This association published a collection of papers entitled "Tajikistan", in which included 13 papers about geography, climate, nature, demography, history, ethnography, natural resources etc. Bartol'd's article "The Tajiks: A Historical Essay" was also published in this book.

In this work Bartol'd gave historical descriptions of ancient Khorazm people, cultural and commercial activities of Sogd people, the origin and the historical transition of meaning of the terms "tadjik" "galcha" "tat" "sart", historical and geographical informations about Badakhshan, Darvaz, Karategin, the language situation among local urban dwellers in the end of the Russian Empire period. In other words, he described the history of Iranian peoples in Central Asia from ancient times, not the history of Tajiks in the territory of Tajikistan. But this style of description of history was applied with the description of Soviet Tajik national history later. Bartol'd's this article determined the direction of historical studies on Tajik people, and it has important significance for ethnic studies of Central Asia.